

2023年度

入学試験問題
(A日程)

国語

注意

- 1 「開始」の合図があるまで開いてはいけません。
- 2 「開始」の合図で、1/5から5/5まで問題が印刷されていることを確かめなさい。
- 3 解答用紙に受験番号を書きなさい。名前を書いてはいけません。
- 4 答えはすべて解答用紙の指定された解答欄に書きなさい。問題用紙に書いても得点になりません。
- 5 解答用紙はこの表紙の裏にあります。
- 6 「終了」の合図で、すぐに筆記用具を置きなさい。
- 7 問題および解答用紙は机の上に置き、持ち帰ってはいけません。

雲雀丘学園高等学校

特定の目的に向けて他者をコントロールすること。私は、これが利他の最大の敵なのではないかと思っています。ボウトウで、私は「利他ぎらい」から研究を出発したとお話ししました。なぜそこまで利他に警戒心を抱いていたのかというと、これまでの研究のなかで、他者のために何かよいことをしようとする思いが、しばしば、その他者をコントロールし、支配することにつながると感じていたからです。善意が、むしろカベになるのです。

たとえば、全旨になって一〇年以上になる西島玲那さんは、一九歳のときに失明して以来、自分の生活が「毎日とはバスツアーに乗っている感じ」になってしまったと話します。「ここはコンビニですよ」。「ちよつと段差がありますよ」。どこに出かけるにも、周りにいる晴眼者が、まるでバスガイドのように、言葉でことこまかに教えてくれます。それはたしかにありがたいのですが、すべてを先回りして言葉にされてしまうと、自分の聴覚や触覚を使って自分なりに世界を感じることができなくなってしまいます。たまに出かける観光だったら人に説明してもらおうのもいいかもしれない。けれど、それが毎日だったらどうでしょう。

「障害者を演じなきゃいけない窮屈さがある」と彼女は言います。晴眼者が障害のある人を助けたいという思いそのものは、すばらしいものです。けれども、それがしばしば「善意の押しつけ」という形をとってしまう。障害者が、健常者の思う「正義」を実行するための道具にさせられてしまうのです。

若年性アルツハイマー型認知症当事者の丹野智文さんも、私によるインタビューのなかで、同じようなことを話しています。

助けてって言うてないのに助ける人が多いから、イライラするんじゃないかな。家族の会に行っても、家族が当事者のお弁当を持ってきてあげて、ふたを開けてあげて、割り箸を割って、はい食べなさい、というのが当たり前だからね。「それ、おかしくない？ できるのになぜそこまでするの？」って聞いたたら、「やさしいからでしょ」って。「でもこれは本人の自立をウバってない？」って言ったたら、一回怒られたよ。でもぼくは言い続けるよ。だってこれをずっとやられたら、本人はどんどんできなくなっちゃう。

認知症の当事者が怒りっぽいのは、周りの人が助けすぎることからなんじゃないか、と丹野さんは言います。何かを自分でやろうと思うと、先回りしてぱつとサポートが入る。お弁当を食べるときにも、割り箸をぱつと割ってくれるといったように、やってくれることがむしろ本人たちの自立をウバっている。病気になったことで失敗が許されなくなり、挑戦ができなくなり、自己コウテイ感が下がっていく。丹野さんは、周りの人のやさしさが、当事者を追い込んでいいます。

ここに圧倒的に欠けているのは、他者に対する信頼です。目が見えなかったり、認知症があったりと、自分と違う世界を生きている人に対して、その力を信じ、任せること。やさしさからつい先回りしてしまうのは、その人を信じていないことの裏返しだともいえます。

社会心理学が専門の山岸俊男は、信頼と安心はまったく別のものだと論じています。どちらも似た言葉のように思えますが、ある一点において、ふたつはまったく逆のベクトルを向いているのです。

その一点とは「不確実性」に開かれているか、閉じているか。山岸は『安心社会から信頼社会へ』のなかで、その違いをこんなふう語っています。

信頼は、社会的な不確実性が存在しているにもかかわらず、相手の（自分に対する感情までも含めた意味での）人間性のゆえに、相手が自分に対してひどい行動はとらないだろうと考えることです。これに対して安心は、そもそもそのような社会的な不確実性が存在していないと感じることを意味します。

安心は、相手が想定外の行動をとる可能性を意識していない状態です。要するに、相手の行動が自分のコントロール下に置かれていると感じている。

それに対して、信頼とは、相手が想定外の行動をとるかもしれないこと、それによって自分が不利益を被るかもしれないことを前提としています。つまり「社会的な不確実性」が存在する。にもかかわらず、それでもなお、相手はひどい行動をとらないだろうと信じていること。これが信頼です。

つまり信頼するとき、人は相手の「I」を尊重し、支配するのではなくゆだねているのです。これがないと、ついつい自分の価値観を押しつけてしまい、結果的に相手のためにならない、というすれ違いが起こる。相手の力を信じていることは、利他にとって絶対的に必要なことです。

私が出産直後に数字ばかり気にしてしまい、うまくジュニユウできなかったのも、赤ん坊の力を信じられていなかったからです。

もちろん、安心の追求は重要です。問題は、安心の追求には終わりがなく、赤ん坊の力を信じられたいなかつたからです。信頼はリスクを意識しているのに大丈夫だと思ふ点で、不合理な感情だと思われるかもしれませんが。しかし、この安心の終わりのなさを考えるならば、むしろ、「ここから先は人を信じよう」という判断をしたほうが、合理的であるということができます。

利他的な行動には、本質的に、「これをしてあげたら相手にとって利になるだろう」という、「私の思い」が含まれています。重要なのは、それが「私の思い」ではないことです。

思いは思い込みです。そう願うことは自由ですが、相手が実際に同じように思っているかどうかは分らない。「これをしてあげたら相手にとって利になるだろう」が「これをしてあげるんだから相手は喜ぶはずだ」に変わり、さらには「相手は喜ぶべきだ」になるとき、利他の心は、容易に相手をII することにつながってしまいます。

つまり、利他の大原則は、「自分の行為の結果はコントロールできない」ということなのではないかと思ひます。やってみて、相手が実際にどう思うかは分からない。分からないけれど、それでもやってみる。この不確実性を意識していない利他は、押しつけであり、ひどい場合には暴力になります。

「自分の行為の結果はコントロールできない」とは、別の言い方をすれば、「見返りは期待できない」ということです。「自分がこれをしてあげるんだから相手は喜ぶはずだ」という押しつけが始まる時、人は利他を自己ギセイととらえており、その見返りを相手に求めていることになりま。

私たちのなかにもついメバえてしまいがちな、見返りを求める心。先述のハリファックスは、警鐘を鳴らします。「自分自身を、他者を助け問題を解決する救済者と見なすと、気づかぬうちに権力志向、うぬぼれ、自己トウスイへと傾きかねません」（『Compassion』）。

アタリの言う合理的利他主義や、「情けは人のためならず」の発想は、他人に利することがめぐりめぐって自分にかえってくると考える点で、他者の支配につながる危険をはらんでいます。ポイントはおそらく、「めぐりめぐって」というところでしょう。めぐりめぐって行く過程で、私「思い」が「予測できなさ」に吸収されるならば、むしろそれは他者を支配しないための想像力を用意してくれているようにも思ひます。

（伊藤亜紗『うつわの利他——ケアの現場から』）

*晴眼者：目が見える人。

*ハリファックス：ジョン・ハリファックス。人類学者で権僧。

*アタリ：ジャック・アタリ。経済学者。

問一 線部1～8のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 線部①「利他」とありますが、「利他」とはどういうことを説明した部分を本文から探し、解答欄に合うように二十字以内で書き抜きなさい。(句読点、記号は字数に数えます。)

問三 線部②「自分の生活が『毎日とはバスツアーに乗っている感じ』になってしまった」とありますが、ここに表れている西島さんの心情を説明したものと最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア 日常生活において常に人の手を借りなければならぬ現実には、無力感を抱いている。
- イ 日常生活のささいな場面だけれど手が助けしてくれる毎日に、感謝の気持ちを抱いている。
- ウ 日常生活において常にだれかが介入してくることに、生活を邪魔されていると感じている。
- エ 生活の場面を毎日のようにだれかが説明してくれることに、わずらわしさを感じている。
- オ 生活のあらゆる場面をだれかが説明してくれることに、新鮮な感動と喜びを感じている。

問四 線部③「それがしばしば『善意の押しつけ』という形をとってしまう」とありますが、このようになる理由を筆者はどう考えていますか。それを説明した次の文の()にあてはまることを本文から十字で探し、書き抜きなさい。(句読点、記号は字数に数えます。)

障害をもつ人に対し、() 気持ちが欠けているから。

問五 線部④「これ」の指示内容を、本文の()ばを使って二十五字以内で説明しなさい。(句読点、記号は字数に数えます。)

問六 線部⑤「『不確実性』に開かれているか、閉じているか」とありますが、「『不確実性』に開かれている」とはどういうことですか。解答欄に続くように、本文の()ばを使って三十五字以内で説明しなさい。(句読点、記号は字数に数えます。)

問七 Ⅰに入る()ばとして最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア 先天性
- イ 自律性
- ウ 可能性
- エ 社会性
- オ 確実性

問八 線部⑥「それが『私の思い』ではない」とはどういうことですか。五十字以内で説明しなさい。(句読点、記号は字数に数えます。)

問九 Ⅱに入る()ばを本文から二字で探して書き抜きなさい。

問十 線部⑦「ポイントはおそらく、『めぐりめぐって』というところでしょう」とありますが、ここで筆者が述べようとしたことの説明として最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 「情けは人のためならず」の発想が権力志向に傾かないためのポイントは、自分の行為が他者に与える影響や効果について分析し、検討した上で、相手がいつか必ず喜んでくれるはずだという確信のもと、自分に返ってくるものについては過大な期待をせずに行動する点にあるということ。

イ 「情けは人のためならず」の発想が権力志向に傾かないためのポイントは、自分と相手の間に上下関係や立場の不均衡がないことを見極めた上で、他者に与える影響をメリットもデメリットも含めて十分検討し、自分に返ってくるものについては何も期待せずに行動する点にあるということ。

ウ 「情けは人のためならず」の発想が権力志向に傾かないためのポイントは、自分も相手も行為の結果について予測できないということと十分に確認した上で、結果的に相手のためにならなかったとしても、自分にとって利になることがいずれやってくると信じて行動する点にあるということ。

エ 「情けは人のためならず」の発想が権力志向に傾かないためのポイントは、自分の行為が常に他者に影響を与えようとは限らないということと理解した上で、相手から自分に返ってくるものがいつになるかを期待せず、相手が本当に喜んでくれるまで辛抱強く行動する点にあるということ。

オ 「情けは人のためならず」の発想が権力志向に傾かないためのポイントは、自分の行為が他者に与える影響や効果を決して予測できないということと自覚した上で、自分に返ってくるものを期待することも、誰かの役に立つという成果を求めることもなく、行動する点にあるということ。

問十一 本文の内容に合致するものとして最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

- ア 利他的行動は相手を苦しめることが多いので、つつしまなければならぬ。
- イ 真の利他的行動とは、様々な場面を想定して他者のために行動することである。
- ウ 結局のところ他者の気持ちはわからないので、真の利他的行動は存在しない。
- エ 純粹に他者を思う気持ちが根底にあっても、利他的行動になるとは限らない。
- オ 利他的行動を貫こうとすればするほど、利己心から逃れられないのが人間である。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

魚屋の長男・浩一は、月に二度近所の光月堂の菓子を買って食べるのを楽しみにしている。ある日、浩一は仕事帰りに偶然光月堂の「親爺さん」と会い、煮豆腐で一杯やろうと誘われる。酒を飲みながら親爺さんは、近いうちに娘婿になる一人の弟子への思いを浩一に話し始める。

「いいか、浩一。自分で見つけるから、ものになるんだよ。見て会得できなきや、使い物にならねえんだ。それをあいつは俺のやり方とてめえの動きの違いもわからねえってんだから、嫌なるよ」

その夜、親爺さんは悪い酒を飲んだ。愚痴はいつまで経ってもやまなかった。けれど浩一は、それを迷惑に思うことはなかった。むしろ、「相手が娘婿だと、他の奉公人と違って気を使うことも多いのだから」と気の毒に感じた。酒の席で親爺さんは娘婿をなじりながら、最後には必ず彼を救う言葉をつけ足したからだ。気のいい奴なんだよ、優しいんだ、男っぷりもなかなかだろ？ 相手を言葉で救って置いて、自分は苦しい顔で酒を飲むのだ。

もし僕があのお弟子さんの立場だったら、と浩一は考える。細工の仕方や、小豆の煮方、餅をつくコツや——ともかく和菓子を作る上で欠かせない幾多の技をひとつひとつ理屈で説かれることのほうがたぶん辛いだろうな、と思う。手や鼻や耳を使って掴む塩梅を、時間や分量や物差しにいちいち置き換えて押し付けられたら、きつと頭がこんがらがる。そんなふうに住った菓子は、口に含んでも、舌や歯の隙間に砂利が挟まったようになって落ち着かないんじゃないだろうか。うまく胃の腑に落ちないんじゃないだろうか。

よい潰れた親爺さんを光月堂に担ぎ込んだときには、すでに十時を回っていた。「やだ、父さん！」と娘が飛び出してきて何度も浩一に詫げるので、「僕が無理に飲ませたもので」と浩一も詫げた。あのお弟子さんも顔を出し、娘と一緒に親爺さんを奥へと運び込んだのち、ひとり出てきて浩一に丁寧な礼を云った。

「親爺さん、話が面白いので、飲んでいるうちに長つ尻になつてしましまして」

浩一がまた詫げると、「話が？」と、彼は少し意外そうな顔をした。

「店では滅多に話さないんですが、そうですか。お客さんには話すんだな」

うなだれて頬を掻く。

「たまたまです。僕、昔からこの菓子が生き甲斐なもので」

「生き甲斐、ですか」

お弟子さんは浩一の顔を改めて見て、口元に力を込めた。笑いたいのをこらえているのかもしれない。

「私はまだ、そこまで思い入れが湧かないのかもしれない。なかなか難しくって。うちじゃ親父もなにも教えてくれないですから」
彼は素直に思いを漏らしただけで、別段親爺さんを悪く云うつもりなんぞないことは、浩一にも察せられた。親爺さんの愚痴のほうはずっと辛い。それなのに、お弟子さんのこの言葉は、親爺さんの愚痴の半分の豊かさもないように感じられた。

「あ、すみません。お客さんにこんな話」

あとに嫌なものを残さない軽やかな若者の声は耳に心地よくさえあつたのだ。これが彼の素の姿なのだろう。明るくて、気遣いもあつて、伸び伸びしている。新しい職場にはまだ慣れないけれど、もうすぐ婿に入つてここで暮らしていくことを楽しみにしている。それをまざまざと感じながら、浩一はいらぬことを口にした。

「大事な技は、口では説明するのが難しいと思います。僕も魚を仕入れていますが、選ぶ目は誰にも教われなくて、言葉で教えられるとかえってわかんなくなつちやつて。人によつてやり方も違いますし。いろんな人の仕事を見て、自分のやり方を編み出すのが一番いいように思っています」

お弟子さんの顔が引きつった。自分より明らかに年下の、しかもひと月に一度しか買いに来ない客に突然説教をされた戸惑いが総身に満ちていく。

「一応私はここに来る前、別の店で修業しているんです。もう下地はできていると自分では思っています」

「でも……」

喉が詰まって、浩一はひとつ咳払いをしてから続ける。

「親爺さんの菓子は天下一品です。僕はここより旨い菓子を食ったことがないんです」

「だから、なんだっていうんです」

そのとき奥から娘が現れた。押し黙って向き合うふたりを交互に見て、「なに？ どうしたの？」と眉根を寄せた。

浩一は黙って頭を下げ、店を出た。とぼとぼ歩きながら、なぜだか寂しいと感じた。憤るでも、不愉快になるでもなく、ただ寂しい、と思った。ずいぶん来てから、出過ぎた真似をした、という後悔もぼつりと湧いた。浩一は、得体の知れない寂しさにただ取り込まれて、路地への道を重い足取りでたどる。

翌日、昼飯のために長屋に戻った浩一は、格子越しに齋江から呼び止められて蜜柑を三つばかり渡された。

「今朝方、生地屋さんからもらったの。早摘みだけど、甘いつて」

「へえ。紀文でも来たのかな」

と、「冗談を返す」

「紀伊国屋文左衛門？ 若いのに古いことをよく知ってるのね」

「河岸には年寄が多いですからね。昔っからいろんな話をよく聞かされてるんで」

そう、と齋江は笑み、この蜜柑をくれたうちの生地屋さんも物知りよ、と少し自慢げに云い添えた。何十、何百とある反物から、彼女の望むものを毎回びたりと選び出してくれるのだという。齋江が仕事相手を「うちの」なぞと身内のように語るのを聞いたのははじめてだ。よほど信の置ける相手なのだろう。

「望みの反物は、どうやって伝えるんですか？」

「柄が決まっていれば銘柄で云うんだけど、雰囲気だけ思い浮かんでいるものは、なんとなく注文するの」

「なんとなく？」

浩一は、首を突き出す。

「それで、生地屋さんにもうまく伝わりませんか？」

「齋江はあごを引いた」

「それで伝わらないと、一緒に働くのは辛いものよ」

云って裁ち台に目を遣った。つられてそちらを見た浩一は、台に置かれた布の美しさに胸を衝かれた。藤色をさらに薄くした紫に、小紋で幾筋も流れるような模様が描かれている。見たこともない柄だ。まるで、水面に現れた風紋だ。浩一は蜜柑を手に突っ立つたまま、長いこと、布に広がったその景

色に見とれていた。

十一月の晦日^{みせか}になった。

浩一は迷った挙げ句、光月堂に足を運んだ。あのお弟子さんに会ったら気まずいことは気まずいが、行かなくなったら親爺さんが気にするだろうし、だいいち唯一の楽しみをうばわれるのは浩一自身^Aのひなかつたからだ。

いつものように裏道を通り、垣根越しに作業場を覗く。また、小豆が煮上がった頃合いのようだった。健やかな匂いが立ちこめている。湯気の中で一本の手が動いていた。切るようにすくい、空気を絡めてからフワッと置く。また切るようにすくって——動きに見入っていた浩一は、「おや」と思った。親爺さんの手よりはこなれていない。でも、親爺さんの動きをその手はしっかりと汲み取っていた。位置をずらして、中を覗き込む。そして目を瞞^Bった。しゃもじを握っていたのは、あのお弟子さんだった。

親爺さんはかたわらで別の作業をしながら、時折娘婿へ目を放つては、「もうちょっと手際よくやれ」と注意する。ただその声は、以前と違ってわずかな安心を含んでいた。

浩一は半信半疑で店に入り、「ごめんください」と奥に声を掛けた。ぼんやりしていたせいで、菓子を選ぶ前に人を呼んでしまったことに慌てたが、すでに前掛けで手を拭きながらのれんを分けて奉公人が出てきたあとだった。よりもよって、あのお弟子さんである。

彼は浩一を見ると、「あ」と息を呑んだが、すぐに「なににいたしましたしょう」と、落ち着いた声で云って台の前に立った。

浩一は急ぎ込んで番重を見渡す。「えー、えー」と繰り返しながら、とりあえずきんつばをひとつ頼む。汗だくになって値段ちようどの小銭を平白^Cに置いた。

お弟子さんは先に小銭を木箱に仕舞^Dってから、経木の上にきんつばをひとつ、載せた。しばらくなにか考えるふうになっていたが、その隣にもうひとつ、菊の練りきりを置いた。

「あ、僕、ひとつとお願いしました。ひとつ分の金しかなくて」

彼は浩一が云うのを聞き流し、経木を経木紐^Eで結んで手際よく包装紙でくるむ。包みを浩一に手渡しながら「この間の、御礼です」と、ぶっきらぼうに告げた。

「もうひとつ分の御代^Fは、俺があとで払っておきますんで」

そう云い置くと、さっさと奥に引込んでしまった。

店に取り残された浩一は、両手の平に載った包みと、奥に続くのれんを互い違いに見ながらしばらく立ちつくした。改めて包みに目を落としてからのれんに向かって深々とお辞儀をした。

店を出て、裏通りを歩いていく。両手の平は、まるで巣から落ちた雛^Gでも抱えているような慎重さを保って、浩一の胸の前にある。

——誰と食べようか。

浩一は考えている。光月堂の味を誰と分け合おう。店を出たときからずつとうれしく思索している。

(木内昇『よこまち余話』)

*鮎江：近所に住む女性。夫を亡くし、着物の仕立てを生業にしている。

*番重：和菓子並べて入れる長方形の浅い箱。

*経木：菓子を包むのに使う、杉・ひのきなどの木材を紙のように薄く削ったもの。

問一 ——線部①「自分で見つけるから、ものになるんだよ」とありますが、親爺さんは和菓子作りにおいて自分で見つけなければいけないものが何だと言っているのですか。本文から十五字以内で探し、書き抜きなさい。(句読点、記号は字数に数えます。)

問二 ——線部②「相手を言葉で救っておいて、自分は苦しげな顔で酒を飲むのだ」とありますが、浩一は、娘婿に対する親爺さんの気持ちをどのように考えていますか。これを説明したものと最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 弟子としての姿勢には不満があるが、彼が真摯に仕事に取り組んでいることはわかっているため、苦しいのだろうと考えている。

イ 弟子としての姿勢に不満があるので、彼を娘婿として迎えることに不安があり、娘のことを思って苦しいのだろうと考えている。

ウ 弟子としての姿勢に不満があるので、彼がいずれ店を継ぐ立場になることをすぐに認められず、苦しいのだろうと考えている。

エ 弟子としての姿勢には不満があるが、職人としての彼の技術には一目置いている部分もあるため、苦しいのだろうと考えている。

オ 弟子としての姿勢には不満があるが、娘婿になる人として彼に優しくしてあげたい気持ちもあり、苦しいのだろうと考えている。

問三 ——線部③「うちじゃ親父もなにも教えてくれないですから」とありますが、お弟子さんは親父(親爺さん)に何を求めているのですか。それを説明したものと最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 技術を身につけるためのコツを、実際にやって見せてもらうこと。

イ 技術や分量について、一つ一つ丁寧に言葉で説明してもらうこと。

ウ 店に代々伝わる特別な技法と味を、包み隠さず教えてもらうこと。

エ 店の跡取りとして知っておくべき心構えを、説明してもらうこと。

オ 職人としてあるべき姿を、ことあるごとに示し見せてもらうこと。

問四 ——線部④「浩一は、得体の知れない寂しさにただ取り込まれて、路地への道を重い足取りでたどる」とありますが、このときの浩一の心情を説明したものとして最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア 親爺さんがお弟子さんに求めていることやその真意を、なんとかわかってもらいたいという思いで話したのに、お弟子さんには伝わらなかつたばかりか拒絶されてしまい、胸を痛めている。

イ 親爺さんの話を聞いてしまった以上、娘婿になるお弟子さんには菓子職人としての心構えをしっかりと理解してほしかったが、自分の言葉はお弟子さんの心に届かず、挫折感を味わっている。

ウ 親爺さんとお弟子さんのいさかきの背景には職人としての考え方の違いがあり、親爺さんの言い分を古いと考えるお弟子さんの気持ちがわかるだけに、両者が歩み寄れる道はないと絶望している。

エ 娘婿になるはずのお弟子さんが、親爺さんの作る菓子の旨さを認めていないという事実^Hに衝撃を受け、彼を後継者として指導しなければいけない親爺さんの苦勞を想像して、胸が苦しくなっている。

オ 親爺さんの作る菓子がどれほど深い思いから作られているのかを、お弟子さんにわかってもらえなかつたばかりか、想像以上に二人の溝は深く、二人の仲を取り持てなかつたことを悔しがっている。

問五 — 線部⑥「鮎江が仕事相手を『うちの』などと身内のように語るのを聞いたのははじめてだ」とありますが、鮎江がこの生地屋を「身内のように語る」のはなぜですか。その理由を四十文字以内で説明しなさい。(句読点、記号は字数に数えます。)

問六 — 線部A「しのびなかった」、B「目を瞠った」、C「ぶつきらぼうに」の本文中の意味として最も適当なものを、それぞれの語群A〜オから選び、記号で答えなさい。

- | | | |
|---|--------------------|--|
| <p>A し の び な っ た</p> <p>ウ 嫌 だ っ た</p> <p>エ 隠 せ な っ た</p> <p>オ 申 し 訳 な っ た</p> | <p>B 目 を 瞠 っ た</p> | <p>ア 苦 し っ た</p> <p>イ 我 慢 だ っ た</p> <p>ウ 見 逃 す ま い と 目 を 疑 ら し た</p> <p>エ 感 動 の あ ま り 目 が ぐ ら ん だ</p> <p>オ 驚 い て 目 を 大 き く 見 開 い た</p> |
|---|--------------------|--|
-
- | | | |
|---|---|--|
| <p>C ぶ つ き ら ぼ う に</p> <p>ウ そ つ け な く</p> <p>エ も の お じ せ ず</p> <p>オ い や い や な が ら</p> | <p>ア と げ と げ し く</p> <p>イ ふ て ぶ て し く</p> | <p>ア 見 逃 す ま い と 目 を 疑 ら し た</p> <p>イ 感 動 の あ ま り 目 が ぐ ら ん だ</p> <p>ウ 夢 か と 思 っ て ま ば た き し た</p> <p>エ 信 じ ら れ な く て 見 な お し た</p> <p>オ 驚 い て 目 を 大 き く 見 開 い た</p> |
|---|---|--|

問七 — 線部⑥「ただその声は、以前と違ってわずかな安心を含んでいた」とありますが、親爺さんの声がこのようになったのはなぜだと考えられますか。その理由を説明したものとして最も適当なものを次のA〜オから選び、記号で答えなさい。

- A 娘婿が親爺さんの見えないところで鍛錬した結果、事細かに注意しなくてもいいレベルになったことを喜んでいるから。
- イ 娘婿が心を入れ替えてひたむきに仕事に取り組み、親爺さんの助言に素直に従うようになったことを喜んでいいるから。
- ウ 娘婿が親爺さんの動きを見て取り入れようとしており、仕事への向き合い方が変わったことを頼もしく思っているから。
- エ 娘婿が和菓子職人としての確固たる信念を持ち、独自のやり方で仕事に取り組んでいることを頼もしく思っているから。
- オ 娘婿が甘えを断ち切り、和菓子職人の誇りを持つようになったことを、光月堂の後継者として頼もしく思っているから。

問八 — 線部⑦「汗だくになって値段ちょうどの小銭を平台に置いた」とありますが、この時の浩一の様子として最も適当なものを次のA〜オから選び、記号で答えなさい。

- A 年下にもかかわらず同じ職人として娘婿に助言をしたことで、生意気な客だと思われたのではないかと気に病んでいたが、何事もなかったかのような素振りで淡々と接客をする彼を前にして、一人で気にしていた恥ずかしさを取り繕おうとしている。
- イ 親爺さんと娘婿の仲を何とか取り持ちたいと思っていたことではあったが、家族の問題に口を出してしまった気まずさをずっと気にして過ごしてきたので、彼がまるで身内のように気を遣わない態度で接してきたことに戸惑い、動揺を隠せずにいる。
- ウ 和菓子職人の仕事の難しさを理解できていないにもかかわらず、偉そうなことを言ってしまったため、娘婿が気を悪くしているのではないかと怖気づいていたが、何事もなかったようにやさしく言葉をかけてきた彼を前に驚き、拍子抜けしている。
- エ 和菓子作りに関しては素人の自分が差し出がましいことを言ってしまったという思いから、娘婿に顔を合わせるには具合が悪いと思っていたが、その彼が何事もなかったような素振りで接客をしてきたため動揺し、必死に自分を保とうとしている。
- オ 親爺さんの味方をして娘婿を批判するような言い方をしてしまったことが引っかけかり、娘婿にはしばらく会いたくないと思っていたのだが、淡々と接客をする彼の様子からまだ許してくれていないことを感じ取り、いたたまれなくなっている。

問九 — 線部⑧「両手の平は、まるで巢から落ちた雛でも抱えているような慎重さを保って、浩一の胸の前にある」とありますが、Hさんはこの表現について次のようなノートを作成しました。これを読んで(1)、(2)の問いに答えなさい。

【ノート】 「両手の平は、まるで巢から落ちた雛でも抱えているような慎重さを保って、浩一の胸の前にある」という一文についての考察。

① この部分は、お弟子さんから受け取った菓子を持つ浩一の心情を表している。

② 「雛でも抱えているような慎重さ」という表現からわかる、浩一の様子と心情。
 「様子」落とさないように気をつけて抱えている様子。 ↓ 「心情」小さな存在を (A) (気持ち)
 ☆「巢から落ちた雛」とは、「ひとり立ちしようと飛ぶ練習をしている雛」のこと。(インターネット調べ)

光月堂の菓子

ひとり立ちしようとする雛

← B

を (A) (気持ちで抱えている)

を 間近で見られたことに対する浩一の喜び。 ↑この一文の浩一の心情。

- (1) (A) にあてはまることばを五字以内で考えて書きなさい。(句読点、記号は字数に数えます。)
- (2) (B) にあてはまることばを十字以内で考えて書きなさい。(句読点、記号は字数に数えます。)

	1	ボウトウ
	2	カベ
	3	ウバ
	4	コウテイ
5	ジュニユウ	
6	ギセイ	
7	メバ	
8	トウスイ	
えて		って

問一

問二

問三

こと。

問四

問五

問六

ことを前提としているということ。

問七

問八

問九 問十 問十一

--	--	--

二

問一

問三

問二 問四

--	--

問五

問六

問七 問六

	A
--	---

問八

--

	B
--	---

	C
--	---

問九

(1)

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

(2)

--	--	--	--	--	--	--	--	--	--

受験番号	
得点	

授乳	5 ジュニユウ	冒頭	1 ボウトウ
犠牲	6 ギセイ	壁	2 カベ
芽生	7 メバ	奪	3 ウバ
陶酔	8 トウスイ	肯定	4 コウテイ

他者のため	他の者のため
ことに何かよい	他に何かよい
こと。	こと。

問三
エ

その力を信じ、任せ

問五

本人ができることまで	本人ができることまで
先回りして助けるこ	先回りして助けるこ

相手が想定外の行動を	相手が想定外の行動を
とりに、それによつて自	とりに、それによつて自
分が不利益を被るかも	分が不利益を被るかも
しれな	しれな

ことを前提としているということ。

問七
イ
問八

相手がためになるはず	相手がためになるはず
だといふ思いにあくま	だといふ思いにあくま
で主観にすぎない	で主観にすぎない
がどう思うかうか	がどう思うかうか
ないといふこと	ないといふこと

問九
支配

問十
オ

問十一
エ

手や鼻や耳	手や鼻や耳
を使つて	を使つて
む塩梅	む塩梅

問二

オ

問三

イ

自分の伝えたいこと	自分の伝えたいこと
霧困だけで	霧困だけで
くれる生地で	くれる生地で
信頼し	信頼し
ら	ら

問六
A
ウ

イ

問七

エ

B
オ

C
ウ

問九 (1)
いつくしむ

(2)
お弟子さんの成長